

僕とジャック

この物語は、「ジャックと生きる木　ゝはじまりゝ」を生きる木目線で描いた、俗にいうアナザーストーリー……スピンオフ作品的な立ち位置です。

内容がとても難しく、1回読んだくらいじゃ、分からないかもしれないです。けど、この内容が理解できれば、あなたはもう「ジャックと生きる木」の世界の住民なのでしょう。

※必ず、本編（ジャックと生きる木　ゝはじまりゝ）を読み終わってから読んでください。

僕とジャック

0 〓プロローグ〓

僕の名前は木田祐介（きだ ゆうすけ）。青春を送っている高校2年生だ。

20XX年12月24日。今夜はクリスマスイブ。世の中が沸き上がる日だ。

僕も今日は彼女とデートをする予定がある。

正午に駅で待ち合わせをしている。

っと、そんな話をしていると彼女が来た。

「おまたせ！ 待った？」

「うんうん。全然待ってないよ！ そっちこそごめんね、こんな寒い日にデートだなんて」

「全然いいよ！ 祐介君とデートできるんだから！」

彼女は清水響子（しみず きょうこ）。一言でいうとかわいい。

名前に「清」や「響」がついているように、声がきれいなんだ。僕は、彼女が声優とかに向いていると思う。

「響ちゃんは、今日どこに行きたい？」

「うーん……私はリピセンタ―に行きたいな！ あそこなら何でもあるし！」
リピセンタ―は、街の中央部にある複合型ショッピングセンターだ。

服や雑貨はもちろん、アトラクション施設などもある。

「わかった！ じゃあ行こうか！」

「うん！ 私、楽しみ！」

1 　　ゝ悪夢は突然訪れるゝ

今日はいつもより空が暗い。今日の天気は晴れなのに。

「ねえ祐介君……なんか今日の空、暗いね……」

「そうだね……」

そんなこと思っていると、空がどんどん暗くなる。

おかしい。まだ昼間なのに空が真っ暗だ。

「ねえ……これって……」

暗雲があるわけではないのに、雷鳴が鳴る。

「わっ！ びっくりした……近くに落ちないといいね……」

と、彼女が言った瞬間に、目の前に雷が落ちた。

その瞬間、地面や建物が粉々になり、空に舞う。自分たちも空に浮かんでいく。

「えっ」

どんどんと飛ばされていく。

地面が塵になって消えた。周りの人たちが次々に消えていく。

「自分も消えてしまうのかな……？」

そう独り言を言っていると、自分に雷が当たった。

痛いという感覚を感じる間もなく、意識が遠のいていく……

2 　　ゝ木化ゝ

「うう……はっ！」

気が付いて起きると、自分は森にいた。

「助か……ったのか？」

立って動こうとしても体が重い。

「なんでだろう……体が……重い……」

自分の足元を見てみると、自分の足に木の枝が絡みついていた。

いいや違う！ 自分の足が木になっているんだ！

「あ、ありえないだろ！」

よく見てみると、自分の腕も木になっている。

自分は木になってしまったんだ。

「とりあえず、どこかに人がいないか探そう!」

自分は重い足を動かしながら探しに行く。

ずっと探しまわっていたら、自分と同じように、花になってしまったり、苔（こけ）になっ
てしまった人と会えた。

「どうやら、みんな僕と同じ感じなんだね……」

僕がそういうと、ひまわりが喋る。

「あの……僕、なんでこうなったか分かります」

「えっ? それ本当なの?」

「はい……。実はある研究をしていて、その研究の中で、魔王の存在に気づいたんです」

「魔王……か。」

にわかにも信じがたい話だ。

「ええ。この世界を魔王が支配するという計画を発見しました。その計画を調べていたら色々なことが分かったんです。」

ひまわりが続ける。

「ちょうどクリスマススイブの午後2時に、装置から特殊な電磁波が発生して、空が暗くなり、雷が発生し、色々な物質を原子へと分解するようなんです」

「つまり、これは計画されたものだと? バカけてるんじゃないの?」

とげとげしい言葉を薔薇が話す。

「本当です。実際に計画書もあります。研究の結果、特殊な電磁波の発生方法もわかりました。なんなら、あなたにもう一度電磁波を浴びさせてあげられますが？」

負けじとひまわりも対抗する。

「……チツ」

舌打ちをした後、薔薇が続ける。

「じゃあ、元に戻す方法もわかるのか？」

「ええ……元に戻すには、浸食された地面のコアに光のエネルギーを当て続けたり、色々なことをするのが効果的でしょう……」

かなり難しい話をしてるんだろう。全く分からない。

「わかった。じゃあ、とつとつやっちやおうぜ」

「無理ですよ！ 光のエネルギーを出せる人間たちは消えてしまったし……」

「そうか……じゃあ、俺らがそのエネルギーを出せるようになればいいんだな？」

なんかすごく無理そうな話をしている。

「あの……そんなの出来るの？」

俺が会話に入れるように喋る。

「さすがに無理なはな……いや！ 出来ませう！」

出来るのか。無理そうだけど。

「遥か昔の神話では、『人が姿を変えたとき、人に眠る力（アビリティー）が解放される。』と書いてありました」

「つまり、その力とやらを解放すればいいんだな！」

「はい。じゃあ、私たち生き残った組は、眠った力を開放する作業を頑張らしましょう！」
ひまわりが元気になった。

「これから何年掛かるかは、私にも分かりません。でも、私たちは生き残った組なんです。頑張らしましょう！」

ここにそろったメンバーが全員賛同した。

「おー!!」

3 　　植物科の誕生

僕たちのための基地が建てられ、「植物科」という看板が立てられた。

「植物科って……良いネーミングセンスだな……」

ネーミングセンスを誉められた。嬉しい！

「そうでしょ、そうでしょ！」

「じゃあ、俺らはとっととアビリティーとやらを解放しようぜ！」

薔薇っちがそういうと、ひまわりたちが、どうやってアビリティーの開放をするのかを説明し始める。

「まず……自分の体にマグネシウムの金属板の銅板を刺します。その金属板にコードを接続して、そのコードを「LED電球につなげるんです。」

金属板の種類が、なんかイオン化傾向とかが関係ありそうな感じだな。そして、発電できそうだな……。

「そして、「□□」が光れば力の解放が完了です。その時、光った色によって自分の力の種類が分かるんです」

力には種類があるのか。

「青色なら速度、赤色なら範囲、緑色なら科学に特化した能力を手にします」

「その3種類しかないのか？」

薔薇っちがそういうと、ひまわりたんが答える。

「一応、他に2つあって、黄色は光エネルギー、白色は最強です」

「光はまだわからなくてもないが、最強ってなんだ？」

僕もそれは思った。最強は、その名の通り最強なのだろうか。

「光は、闇に対抗するエネルギー。最強は、すべての能力値が100%なんです」
つまりは、最強っていうことなのか。

「とりあえず、魔王は闇エネルギーでこの世界を支配しているんです。だから、光エネルギーを持つ人が、浸食された土地のコアに、エネルギーを与える必要があるんです」

「つまり、光エネルギーの力をもつ人がいないと、やばいってことね……」

僕にしては割とまともなことを言ったと思う。

「そういうことです。ただ、最強が一人でもいれば大丈夫なんですけどね……。最強の力を持つ人は、他の人に力を渡すことが出来るんです」

「じゃあ、早速やろうよ！」

「いいね！」

みんながそう言うのと、ひまわりたんが金属板とコードを「LED」を持ってきた。

4 ーリベラルタルー

ひまわりたんは、人に金属板を刺して発電する方法を「リベラルタル」と言うと教えてくれた。

結局発電出来るんだ……

リベラルタルは、色々なことに応用できるらしい。

この、自分の力を判定するのにもリベラルタルの応用技らしい。

「じゃあ、僕やるね……」

と、4 ページの間まったく登場していなかった苔くんが言う。

「グサツ………グサツ……」

「苔くん………痛くないの……？」

「うん。音はやばいけど、全然痛くないよ」

グサツって言ってたけど本当に大丈夫なのだろうか。

「苔さん………LED につなげますよ！」

その瞬間、「LED」が眩しく光る。色は………青色だ。

「青色は……速度に関する力に特化しています」

「おお……」

そして、そのまま僕以外全員が「□□」を光らせた。

苔は青色で速度。薔薇たちは赤色で範囲。シロツメ・クサノ介君は白色で最強。そして、ひまわりたちは黄色だった。

「じゃあ、最後は僕か……」

僕は怖かった。痛そうだし。

「じゃあ、木くん……いくよ？」

金属板が刺された。痛くはなかった。

「おお……あれっ？」

光るはずなのに、明るいどころか、暗くなっている。

「これは……黒だ……！」

ひまわりさんが大きく叫んだ。

「黒？ 黒はないはずじゃ……」

「一応、風の噂程度で聞いた話なんですけど……黒色に光った者は、何が起きるか分からない。もしかしたら、災いが起きるかもしれないって……」

うーん……それどこかで聞いたことがあるな……。

あ、思い出した！ あ……鬼になった家族を助ける……あの鬼を斬る刀の色に関する伝説だな。あの、鬼を倒す隊に所属して、刀を握ったら色が変わるみたいな話を聞いたことがある。

つまり、これってパクリ

「あ、木くん？ もし心の中でパクリとか思ったら消し飛ばすよ？」

シロツメ・クサノ介君がそういった。

シロツメ・クサノ介君は人間の時はとても優秀だったがおちよこちよいみたいな、天才と芸人を足して2で割ったような感じの人間だったらしい。

「そ……そんな……パクリだなんて思っていないよ！ 殺して滅する刀の話なんて想像していないよ！」

「そ……そんなことより、木くんのその「ED」の黒色……大丈夫ですかね？」

ひまわりたんが心配してくれた。

「多分、大丈夫だよ！ 何も起きてないし、そもそも木になったこと自体が災いなんだから！」
僕は明るく返した。

「とりあえず、魔王を倒す計画と浸食された土地を戻す計画を立てるよ！」

「なら……魔王を詳しく調べますか……私に任せてください！」

ひまわりたんが元気そうに言ったので、僕はひまわりたんに任せた。

っていうか、なんか勝手に僕がリーダーになってた。

「いやだって……木って一番大きいじゃん……」

みんな口々にそう言う。

というわけで、植物科のリーダーになった僕。

魔王を調べる係のひまわりたん。

後の人は……また後で決めよう……。

5 ぐ存在に気づく

「あの……木くん……ちょっとこれを見てくれる？」

そう言ってひまわりたんが資料を見せてくれた。

「これは何の資料？」

「最近、魔王を調べるために人工衛星を飛ばして、電波とかを放って、生存している人間がいないか探したんですよ」

「ほう……」

「そしたら……生存している人間の存在を2人見つけたんですよ！」

マジか！ 生存している人間はもういないと思っていた。

「それは本当か!？」

「ええ。かなり微弱な反応でしたが。もしかしたら、その人は魔王の存在に気づいていて、自分を守るために、電波を弱くする装置とかが置いてあるのかもしれないです……」

「つまり、魔王を倒すための有能な人材になるかもしれないと？」

「ええ」

希望が見えてきた。もしかしたら本当に、魔王を倒せるかもしれない。

「それで、コンタクトはとったのか？」

ひまわりさんは少し落ち込んで言った。

「残念ながら、コンタクトは難しいかと。家が完全防衛用要塞みたいな感じで、なんか脱出用のロケットもあるようですから……」

もしかしたら、コンタクトを取ったらロケットで逃げてしまうかもしれない。

そう考えると、あちからのコンタクトを待つしかないか。

「それと、その人の個人の情報がわかりました」

「どうやら『オクパシー・ジャック』とそのお母さんの『モザン・ジャック』の2人家族が住んでいるらしい。」

「じゃあ、待っていいようか」

「そうだな……」

「あと……魔王の正体もかなりわかってきました……」

魔王の正体がわかるまで、かなりの時間がかかった。

だが、やっとわかったのだ。

「名前は、『マック・トーマス』ジャック」

ジャック……！ それってまさか……

「ご想像の通り、戸籍データベースと照合したところ、このジャックという3人は家族です」

「そうか……わかった。とりあえず、俺からみんなに報告する。それまでは言わないでくれ」

「わかりました……」

そういうと、ひまわりさんは作業部屋に帰っていった。

「状況が大きく変わったな……」

俺は、植物科のメンバーを集めて、緊急会議を開いた。

「みんな、集まってくれてありがとう。今回はかなり重要な話だ。これによって計画が大きく変わるが、浸食された土地は元に戻る。聞いてくれ」

空気ががらりと変わる。

静かになって、鳥のさえずりまでもが聞こえる。

「まず、生存している人間が確認された」

ひまわりん以外の皆が驚く。

「いや、俺らが森を確認したときは誰も確認出来なかったはずじゃ……」

薔薇っちが言った。

薔薇っちの言う通り、俺らが目視で確認したときは、家も何もなかった。だが確かに、衛星写真には写っている。きっと特殊な加工をしているのだろう。

「そして、魔王の正体も分かった」

久しぶりに苔くんが喋る。

「それはつまり、倒す対象が決まったということの良いのか？」

「それは違う。状況が大きく変わったんだ」

「それはどういう意味だ？」

薔薇っちが入り込んできた。

「今から説明するから！……まず、魔王と生存している人間は血縁関係にあることが分かった。そして、計画を大きく変更するんだが……ねえ、クローバー君……聞いている？」

「クローバーじゃなくて……いや、間違っていないけど……シロツメ・クサノ介だよ？あと、話はしっかり聞いている。安心して」

いや、ゲームしながらそれを言うか。

「まあいいや……変更する計画は、『魔王を倒す』から『魔王を説得する』にする」

「いや、それは無理だって、一番最初に言ってただろ？」

「苔っちの意見もそうなんだ……だが、作戦の最終指揮権は私にある。つまり、責任は私が負う。だから心配するな」

「わかったよ……」

「そして、生存している人間とのコンタクトが取れたら俺一人とその人間で城に向かう」

これはかなり危険な作戦だ。自分でもわかっている。

でも、響子が救えるなら……自分はどうなっても……

「わかった。木がそう言うなら、きっと立派な作戦を練ってるんだろう。だろ？」

「あ、ああ」

「なら、木に任せてもいいよな！なあみんな！」

薔薇っち……！ やっぱり親友と呼べる関係とは、相手の事を常に思っていることなのだろう。

「うん！ 任せてよ！」

詳しく説明をして、みんなからの承認を受けて、ジャックからのコンタクトがあり次第、作戦を実行することになった。

みんな、任せてくれてありがとう。

7 早くもコンタクト

あの会議をしてから、おおよそ2か月が経った。

「木くん！ ジャックさんが拠点に近づいてきていることを確認しました！」

「本当か！ みんな、最終会議を行う！ 集まってくれ！」

僕の声と同時に「待ってました」と言わんばかりに集まってきた。

「みんな！ もうすぐジャック君が来る！ とりあえず、今日の作戦を詳しく伝える！」

「ああ。教えてくれ」

薔薇つちがクールに答える。

「とりあえず、僕たちは人間が生きていたなんて知らないフリをする。そして、僕が拠点に連れ込む。多分、ジャック君は家にお母さんを置いて行っているだろう。だから、僕が結界を張り家に行く」

「ほうほう、随分すごい作戦だね……」

皆っちがそう言ったが、僕は続ける。

「そしたら、そのまますぐに、僕とジャック君で魔王の城に向かう。けど、魔王の城の構造はわかってないんだよ」

もしかしたら迷路みたいになってるかもしれない。大変な作戦になるかもしれないけど、何とかなるだろう……

「まあ、とりあえず城に行って魔王のところに行く。そしたら僕は、魔王を説得する作戦を行う。あとは……何とかなるよね!」

すると、シロツメ・クサノ介君が言う。

「なんか、僕たちが役に立てることある?」

「2つ、みんなに任せたい仕事があるんだよ」

みんなが、こっちに視線を向ける。

「仕事……教えてくれ」

またも薔薇っちがクールに言う。

「1つ目は、僕とジャック君が帰ってきた時に、すぐに浸食された土地を戻せるように準備をしておいてくれ。そして、もう一つは……」

みんなが息をのむ。

「もう一つは、城の周りを含む、城にいる敵を倒しておいて欲しい……」

僕とひまわりさんの調査では、城の周りにいる敵も含めて、城にいる敵は、おおよそ30万
体ぐらいだ。

「かなり過酷な仕事になると思うんだ。けど、是非やってほしい………出来る?」

みんなは、息を合わせてこう言った。

「もちろん！ 植物科の俺らなら、それぐらいお安い御用だぜ！」

嬉しい！ 心強い仲間たちだ。

「じゃあ……お願いするよ！」

8 合流

「木くん！ ジャックさんがいらっしやいます！ 到着するまでおよそ1500m！」

「わかった。じゃあ、行ってくるよ……」

拠点を出ると目の前には人がいた。

作戦通り、人がいるとは知らなかったような演技をする。

「君は……人間!?」

目の前の人が話し始める。

「ええ。私は、この世界を支配している魔王を倒そうとしている『ジャック』と言います。協力していただける仲間を募ろうと、この植物科の拠点に参りました」

どうやら、ジャック君は礼儀正しい人みたいだ。

「まだ人間が生きていたのか……！ とりあえず拠点に来い！」
作戦通り、拠点に連れ込む。

そして、拠点に入って会話を始める。

「そうだったのか。まだ生きている人間がいたのか」

「けど、僕とお母さんしか残っていません」

「なんだと！ お母さんは今どこに！」

「え、えっと……家です」

予想通り、家にお母さんを置いてきたようだ。

僕は慌てる演技をする。

「そうか。ならば今日にでも戦いへ出発しよう」

ジャック君が嬉しそうに言う。

「え！ 本当ですか？」

「ああ。実は、私たち植物科も、ちょうど今日、戦いに向けて出発しようとしていた所なん
だ。」

「じゃあ、行こうか」

「はい！」

ジャック君は本当に嬉しそうだ。

そういうと、ジャック君はしゃべりかけてきた。

「あの……木さん……」

とりあえず、仲良くしていけるように、同じ高校2年生っていう設定にして、「さん」呼びはやめてもらおう。

「ん？ あ、それより……僕のこと『生きる木』って呼んで！」

「え？ あ、はい。生きる木さん……」

「だから……一応、僕と君は同じ高校2年生なんだからさ、僕らは友達！ 敬語とか使わずに仲良くしていいこうね！」

「分かったよ……。い……。生きる木！」

やった。作戦通りだ。

「そうそう！ じゃ、これからよろしくね！ ジャック！」

「おう！ 生きる木よ！」

「生きるよ！」 もどうかと思うんだけど……まあいいや。

とりあえず、ジャックの家に行って結界を張る計画をジャックに伝える。

「じゃ、まずはジャックの家まで送って。そしたら、俺の魔法を使って、結界を張る」

「結界って？」

予想通り、ジャックが結界について気になっている。

僕は説明する。

「お母さんを守るための結界さ。一応この世界の中では、五本の指に入るくらいの強力な結界を張るよ。」

「え？ 木って、そんな強い技使えるの？」

その質問は想定にないな……。

まあ、適当に流せばいいか。

「まあまあ！ そんなの、気にしないこと！ とりあえず行くよ！」

「お、おう……」

とりあえず、不審に思われないように、知ってはいるけど、ジャックの家の場所を聞くことにする。

「で、家はどこにあるの？」

「この森を北の方向に2㍻3ぐらい行つたところだよ」

僕は当然知っている。

「おう！　じゃあ、とりあえず急ごう！」

「え？　う、うん！」

ジャックの不安そうな声をよそに、僕はジャックと共に進む。

かなり進んだところで、要塞のような建物が見えてきた。

「ここがジャックの家？」

返事がない。

「おい……ジャック？」

何か考え事をしているようだ。

「……おい！　ジャック！」

「あつ、ごめん……考え事をしてたよ……」

予想通り、考え事をしてた。

そして僕は、計画通り結果を張ることにする。

「じゃ、とりあえず結果を張るから、ちょっと待ってて。とりあえず、お母さんに結果を張ることを伝えておいて……」

「おう。頑張って！」

「じゃ、結界はりまーす……」

「闇の紋章がにじみあがる、彼らは絶えず消滅する」

ジャックは家に向かった。

「たとえ隕石が降ろうとも、全ては再構成され、守り切るだろう」

「自壊と結合を繰り返し、何もかもを元の状態へと戻すだろう！」

「すべてを守れ！ 第九の戦術（アビリティー）、『麓解（ろっかい）の輝き』！」
家の周りが麓解（ろっかい）のドームで守られた。

「はあ……はあ……終わったよジャック……」

ジャックは、僕が疲れていることを微塵とも察せずに質問してくる。

「第九の戦術ってことは他にもあるの？」

「……う、うん。でも第九が最強の技だよ」

「じゃあ、もう行こうか！」

「うん！」

「さて、もうめんどくさいから魔王の城に行くか！」

「え？ 早くね？」

たしかに、基地を出てから、30分ぐらいしか経ってない。

ジャックも、家から出て1時間ぐらいだろう。

でも、早く行きたい。

また、響子と会いたい。

「でも、もう行かないと……ね？」

「う、うん……」

ジャックは落ちていないようだが、進むしかない。

9 ～ Rapidez ～

とりあえず、城まで徒歩だと20時間ぐらい掛かる。

高速移動の戦術を使えば一瞬だが、レベルが高い第九を使ったから……疲れた。

ジャックには、

「第九の戦術が最強だからさ、戦術をリチャージしなければならんだよ……だから、時間かかるから、ちょっと待っててね！」

という設定を作って、休憩をすることにした。

すると、ジャックが話しかけてきた。

「……ねえ、さっきの説明じゃやっぱりわかんないや」

仕方ないからざっくりと説明しよう。

「ジャックは理解力が低いなあ……このゲームとかやったことあるよね？ そんな感じとらえちゃってよ」

「ふーん……」

多分だけど、分かってないな……

そのまま、おおよそ3時間経った。

するとジャックが話しかけてきた。

「木？ リチャージまであとどれくらい？」

まあ、疲れも取れてきたし、そろそろいいだろう。

「うーん、もういいかな？ じゃあ使っちゃう？」

「お、やったー！ 高速移動の技は、俺も気になるな！」

その言葉は嬉しい。

「それじゃ、行きますかー」

僕は、歩きながら呪文を読み始める。

「タイム&クリティカル！ 時を加速させろ！ 第二の戦術、『オーバーキーパー』！」

この戦術は、自分に速度上昇効果を与え、光エネルギーのオーラをまとわせて、更に速度を上げる、速度の力と光の力を組み合わせた戦術。

普段使いでは、一番有能な技だ。

「おお！ 速い！」

「どうよ、ジャック！ 僕のアビリティーは！」

「すごいよ！ こんな技が9種類もあるんだ！」

ちよっただけ説明してあげようか。

「このアビリティーっていうのは、植物科の時にみんなで研究したんだ。そしたら、人々に眠

る技を発見したんだ。」

「へえ。植物科ってすごいね！」

とりあえず、早く行かなきゃ。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだよ……」

オーバーキーパーの力で、17時間ぐらい掛かる道を、2時間まで短縮できた。そして、城が見えてきた。

「あ、ジャック！ あれが多分、魔王がいる城だよ！」
城からは、まがましい霧囲気が出ている。

「なんか寒くなってきたね……」

「うん……城付近の温度は普通に低いからね……」

そして、城の門の前についた。

「木？ ここがその城であってるの？」

「うん。あってるはずだよ」

「じゃあ……入ろうか……」

「……うん」

僕は生きる木と共に進んでいく。

城の周りの敵は、植物科の皆が倒してくれた。

城の中の敵たちも、植物科の皆が倒してくれたようだ。

そのまま城の廊下を進むと、大きな広間に出た。

「お、この部屋は……」

「ロビーみたいなのところかな？」

「ねえジャック、このロビーって、ジャックの家の集落よりも広いよね……」

辛辣に言ってるやっただ。

「まるで迷路だな」

無視された。

「ジャックの言う通りだねー（棒）」

ロビーは薄暗く、沢山の部屋と繋がっていると思われる廊下がある。

僕たちが足を止めていると、

「こっち来いよ」

「!？」

はつきりと聞こえた。

僕の声でもなく、ジャックの声でもない。

多分魔王の声だ。

「ね……ねえ、ジャック……今の声って……」

「うん。多分敵だね」

「多分敵の能力で、脳内に直接語りかけているようだ。」

「とりあえず進もう」

「さすがに魔王の能力に驚いて、怯えてしまった。」

「え、そんなこと言うけど、廊下は沢山あるよ?」

「とりあえず、目の前の廊下を進もう」

「わ、分かったよ……」

「僕とジャックは、また進んでいく。」

「廊下は長く、曲がりくねっていて、薄暗い。」

「ねえジャック、どこまで進めば部屋に着くのかな?」

「城を外側からは何度も見たが、内装は一度も見ることがない。」

「本当にどこまで行けばいいんだろうね……」

僕は、この作戦が終われば、響子と会えるという嬉しさと、魔王が説得に応じない可能性の不安の、二つの感情が混ざり合っていて、とても複雑な感情だ。

それでも僕は前を見続ける。

すると、前に扉を見つける。

「ジャック! 扉だよ!」

「木々! やったな!」

ジャックが怯えながら扉を開ける。

ドアがきしむ音がする。

「キィー……」

扉が開く。

中の部屋は、廊下と同じように薄暗い。

「やっと来たか……ずっと待ってたぞ……」

ジャックの動きが止まった。

少し震えている。

多分驚いているのだろう。

「ジャック？ どうしたの？」

「さあジャック。来るがいい……」

魔王がジャックに話しかける。

殺されたはずの、本当のお父さんが。

ジャックは困惑している。

11

く 作戦開始 く

今、ジャックは困惑しているだろう。

当然だ。自分のお父さんと戦わなきゃいけないかもしれないんだから。

魔王は、堂々としている。
だが、作戦はここからが本番だ。

まず、魔王はちよつとイキっていて、堂々としているから、作戦Bにすることにする。
作戦Bでは、「魔王がジャックのお父さん」というオチを先に言つて、「さすがにそのオチはないよね?」というところで、その場しのぎで仲直りさせる作戦だ。

ジャックも、魔王も、誰も傷つけさせない!

「……ねえジャック……」

「ん? どうしたの?」

「まさかだけど……『魔王は消えた父さんだった』なんていうオチとかじゃないよね?」
「!?」

作戦通りだ。ジャックが驚いている。

きつと、凶星だのなんだの思つてゐるんだろう。

ここで一気に畳み掛ける!

「そんなあるあるな、面白くないオチなわけないよね? ね?」

「い……いや、まさかね! まさか……ね? 俺のお父さんが魔王だなんてね? ね、お父さん?」

「え? いや……俺は魔王だけや」

「えいっ!」

おお、まさか殴つてまでお父さんを止めるとは……さすがジャック……。

「痛っ！」

お父さんはかなり吹っ飛んだ。

どうやら耳打ちをしている。

「ごによごによ……」

耳打ちが終わったようだ。

「あ……ああ！ そうだ！ 俺はジャックの父さんだが、魔王ではない！」

ここで、お父さんを永久的に、魔王の座から落とすためにさらに畳み掛ける！

「なんだ！ あるあるオチじゃなかったんだ！」

「そ……そうだよ！ はっはっは……」

ジャックに、一息すらつかせずに更に！ 畳み掛ける。

「いや、あるあるの親子で戦うような感じだったら、2人まとめて星にするとところだったよー！」

「さ、ジャック！ 魔王はいなかったんだし、家に帰ろうか！」

「そ、そうだな！」

ジャックが動揺しているようだ。

効果抜群だな。

「ジャックのお父さんも、家に帰りましょう！」

「お……おう！ そうだな！」

お父さんにも効いているようだ。

「お父さんは先帰っていいですよ！ 僕とジャック君は、少し回っていくので！」

「お、そうか。じゃあ先に帰らせてもらうぜ」

やった。作戦が成功した。

ここまで来たら、あとは浸食された土地を戻すだけだ。

12 　　＼本当のこと＼

まあ、ネタバラシでもするか……

「……………これでいいの？ ジャック……」

「え？」

「……………これで誰も戦わずに、世界が平和になるの？」

「……………知ってたんだね」

「当たり前じゃん！ 僕たちを舐めないでよね？」

ジャックは心の中で色々な事を考えているようだ。

えっ？ 「こういうことをしてくれる『人』が、本当の親友なんだろうか」だって？

それは語弊があるな。

「人じゃなくて木だよ」

「あ、そうか」

あ
やってしまった。

心の中で訂正するつもりだったのに、つい言ってしまった。
まずい。このままじゃ僕の戦術の中にある「読心」を使っているということがバレてしまう。
そんなことを思っているうちに、ジャックは小声で何かを言った。
バレていないようだ。

「え？ 今なんか言った？」

「いや！ 何でもないよ！」

「あっそう……」

声は聞こえなかったけど、心の声は聞こえたよ。

僕の方こそ感謝してるよ。

ありがとう。

「えー……それでは……植物科と魔族との、平和友好条約の締結式を始めさせていただきます」

僕は、植物科のメンバーに、作戦成功であることを伝えて、講和条約の締結式の準備を行うように伝えた。

そして、締結式が行われた。

「早速ではありますが、植魔平和友好条約の内容について読み上げさせていただきます……
それでは、生きる木さんお願いします」

「はい。それでは読み上げさせていただきます」

条文が書かれた紙を開いてみたが、意外と長い。

僕はそれを淡々と読み上げ始める。

植魔平和友好条約

20XX年8月12日

前文

この平和友好条約は、植物科と魔族との間に結ばれる条約ではあるが、これからの世界の平和に関する決まりについて定めたものであり、改定及び無効化、これに変わった新しい条約が結ばれない限りは、現存している人間を含む動植物及び、これから生まれる全ての動植物に対して有効である。

第一条

35

我々は神によって生み出された、神の子であり、今一度それを確認すると共に、皆が平等であることを宣言する。

平等とはすなわち、争いがないことを指す。

第二条

魔王は直ちに、永久的にその座を失うものとして同時に、魔王の座を失った魔族は解散を言い渡す。

植物科は、解散は行わないが、その能力を悪用することを禁止し、悪用が確認され次第、直ちに解散を言い渡す。

本二項の無視、及び違反が確認された場合は、司法の判断を待たずして、一番重い刑を執行する。ただし、司法が素早く判断を下し、刑を認めなかった場合は、刑の執行は行われない。

第三条

我々は、これからも協力をして世界を平和にしていかなければならない義務がある。我々³⁶、公正かつ効率よく、誰もが安心して生活出来る環境を作らなければならない。

第四条

これより、この世界の権力は分散される。

一つは「司法省」。司法省では、動植物に対して、公正に罪を判断し、刑の種類を伝え、執行を行う。

もう一つは「政府省」。法に制限されない限りは、国の全てを管理する。政府省が法に反して

いると判断された場合は、政府省であろうと司法省が刑を下す。
この二つの権力の分散により、世界を平和にする。

第五條

本法に反した場合は誰であろうと、司法省が刑を下す。

刑の種類は四種類ある。

一つ目は「保護觀察処分」。罪が軽いと判断された場合は、収容などをせず、保護觀察処分として、これからの更生を見守る。

二つ目は「懲役刑処分」。罪が軽いとは判断されなかった場合は、特定の収容所に収容を行⁷、一定期間の間、更生プログラムを施行し、プログラムが終了し次第解放し、これからの更生を見守る。

三つ目は「死刑処分」。罪が重いと判断された場合、罪人は死をもって償わなければならない。本刑は、通常施行することがないよう、死刑処分までの基準を高くし、もしも刑が施行されるとなった場合は、関係する者を除いた全ての動植物に対し投票を行い、全会一致だった場合のみ、刑を施行する。その際、罪人を苦しませた場合は、その者を懲役刑処分とする。すなわち、限りなくこの刑が施行されないようにし、施行されるとなった場合は、苦しませずに安楽死させること。

四つ目は「無間処分」。本刑は、植物科か魔族の者のみに適応されるもので、世界を重大な危

機を及ぼした場合、または本法の第二条を違反した場合にのみ施行される。「無間」と呼ばれている、一度入った者が帰ってきたことは一度としてない空間に、罪人を送ることが本刑である。もし、無間から戻ってきた場合は、その者に再び生きる権利を与え、通常の生活が送れるように、我々が保護する。

終文

以上が本法の条文とする。

長かった。

「えー……以上が条文となりますが、これでよろしければ署名をお願いします」
魔王も。僕も。署名を行う。

その字は濃く、生き生きとしていて、まるで世界の平和を願っているようだ。

……いや、流石にそれは言い過ぎか。

「ありがとうございます。以上をもちまして、締結式を終了させていただきます。後は、ご自由どうぞ」

そう言われると、魔王……いや、ジャックのお父さんは、家に帰っていった。

その後ろ姿からは禍々しさは感じず、立派なお父さんのオーラを感じた。

「じゃあ、僕もジャックの所にいつてくるねー」

僕がそう言うのと、みんなは笑顔で手を振ってくれた。

「ジャックーお待たせー」

そこにはジャックがいた。何か考え事をしているようだ。

「ああ、お帰りー……ねえ、木？」

「ん？ どうしたのジャック？」

ジャックは不思議そうにこっちを見て言う。

「あの中二び……じゃない、かっこいい技の中に世界を戻すとかないの？」

やっぱり中二病って思ってたんだね……僕は皮肉っぽく答える。

「今、『中二病』って言おうとしたよね！ ね！ あゝ、元に戻せるのに、やる気失せたわ……」

」

ジャックは割と本気で謝っているように言う。

「ごめんって！ それより、元に戻せるなら戻してよ！」

こいつ……話を変えたな？

「わかったよ。今、植物科の皆と調整してるから、終わったら元に戻すよ。どうせ暇なら家に戻っててれば？」

ちよつと皮肉を込めていったが、ジャックは微塵とも察せずに話を進める。

「じゃあ、行ってくるね」

「うん！ お父さんによろしく言っといて」

「うん！」

そう言うのと、ジャックは歩いていった。

「じゃあ、会議を始めるよー」

14

く 作戦会議 く

植物科のメンバーを集めて、会議を始める。

「とりあえず、侵食された土地を戻す作戦の係を決めるねー」
皆がうなずく。

「ひまわりさんの調べで、侵食された土地のコアに、光のエネルギーを一定時間送り続けられ戻せるのよ。これが結構な力を使うんだよ……で、この侵食された土地のコアにエネルギーを送り続ける係は、薔薇っちね」

「大変そうだけど頑張るよ。あと、薔薇っちっていうのやめろって……俺たちだけならいいけど、ジャック君が見てるかもしれないだろ？ ……そんなことより、光エネルギーならひまわりが、光属性なんだし、ひまわりの方が適任なんじゃないのか？」

当然、ひまわりさんが光属性だということを見込んで、別の仕事がある。

「ひまわりさんには、『リストアパッチ』の実行をしてもらうよ。特殊な電磁波を土地に送ってもらうんだけど、その電磁波の事をリストアパッチって言って……」

「特殊な量子コンピュータだけが、リストアパッチを発信出来るから、その量子コンピュータを扱える僕、かつ電磁波の発生に必要な光エネルギーを一番出せる僕が、その仕事って事だね？ 木くん？」

「う、うん。リストアパッチ知ってたんだねー」

話が早くて楽だ。

「で、シロツメ・クサノ介君は、周りの防御ね。最強だからなんでも出来るでしょ？」

「おう」

シロツメ・クサノ介君は乾いた返事をする。

「苔さんは、リストアパッチ実行時に、電磁波の確認と周囲の異常確認をして、もしやばかったら、ご自慢のスピードで……どうにかして！」

「ええ……」

「で、チューリップは、第四の戦術の『フィールドサイト』を使って、空間を保護して。部外者を入れないように頑張ってる」

何ページかぶりに登場したチューリップには、かなり大きな仕事を任せよう。

「わかったッピ。それより木ーさんは、何をするッピか？」

「僕は、指揮官的な？ みんなに指示を与える役だよ」

別にサボリじゃないからね？

「じゃあ、これで良いね。ジャックに電話するよ」

あ、そういえば番号聞いてなかった。

「ジャック君の番号なら、さっきお母さんのスマホをハッキングして、電話番号は入手したから。あと、名前が出るように、電話帳に木くんを登録しておいたから」

ひまわりさんは技術開発局かな？

とりあえず、感謝して電話をかけよう。

「プププ……ブルルルル……ブルルルル……ガチャ」

本当に繋がった。

「もしもし？ ジャック？」

「はい？ どうしたの？」

「いやー、世界を元に戻す準備、整ったよー」

「じゃあ、すぐ行くよ！」

「はい、待ってるよ……ガチャ」

「あ！ ジャック！ 来たね！」

「ふう…。これから始めるの？」

僕は枝を振って答える。

「せやで」

15

リストアパッチ

「じゃあ、定刻通り実施しますか」

僕はとりあえず計画実施をする。

「じゃあ……薔薇っちは、コアにダイレクトアタック開始！」

苔さんは、周囲の電磁波の確

認と異常確認を始めて！」

「ういっ！」

「はーい」

コアへの光エネルギーのダイレクトアタックが効いてきた。

地面が揺れている。

「よし！ ひまわりさんのグループは『リストアパッチ』の実行！」

少しずつ地面の揺れが激しくなっている。

同時に地面が盛り上がっている。

「チューリップ！ フィールドサイトの稼働状況は？」

「正常に空間を保護してるッピ！」

「クサノ介君！ 周りに敵はいないよね？」

「おう！ 大丈夫だよ！」

よかった。魔王が条約を破って攻撃してくるかと思ったが大丈夫そうだし、魔王はもういないのか……

そろそろリストアパッチの効果が来るはずだ。

と、同時に地面からエネルギーを感じる。

……来るっ！

「ジャック！ 来るよ！」

地面が盛り上がって爆発した。

土が舞って、原子ほどの小ささになって生まれ変わっていくようだ。

同時に自分たちも飛ばされていく。

「わーお……このままじゃ宇宙に行っちゃうんじゃないの……？」

「大丈夫だよ、ジャック！ さあ、戻るよ！」

空に舞っていた土が元に戻る。

同時に、壊されていた建物が構成されていく。

黒く染まっていた土は元の色に戻り、枯れた木には葉が生い茂ってくる。

地面がアスファルトで舗装されていく。

世界が元に戻っているのだ。

「……世界が……元に戻ったんだ……」

そうだ。世界は元に戻ったんだ。

響子と……また会えるんだ。

「うん。すごいでしょ？」

「ありがとう」

「えっ……うん！ 感謝したまえ〜！」

僕は態度を大きくして言った。

「へっ！ 元の世界に戻ったけど、生きる木は変わんないな！」

「なんじゃそれ！」

二人で笑いながら、地面に戻ってきた。

「俺はちよつと周りを見てから、家に戻るよ。本当にありがとう！」

ジャックはそう言った。僕もそうしようかな……？

とりあえず、お別れをしよう。

「はーい！ なんかあったらまた来てね〜！」

「うん！ じゃ、また今度！」

世界は元に戻ったんだ。

僕は大きな誤算をしていた。

植物科の皆の力で、建物を含めた、浸食された土地は戻ってきた。

建物の中や地下にいて、あの雷の光を浴びていなかった人達は、返ってきた。

そう。それだけだ。

外にいて、あの光を浴びた人達は返ってきてない。

あの雷が落ちたのはクリスマススの昼だ。

外に多くの人がいただろう。

その……リア充が沢山いただろう。

その人たちは返ってきていないんだ。

響子も。返ってきてない。

もう戻ってくることはないのだろうか。

次の仕事は決まった。

消えた人たちを元に戻すんだ。

響子を含めた、人類皆を。

友達とまた会うために。

響子とまた会うために。

僕の心境はより複雑になった。

まずは植物科に戻ろう。全てはそれからだ。

くくくおしまいくくく